幸いな僕

―― 藤井和人聖職候補生、梁權模聖職候補生の
執事按手にあたって ――

ルカによる福音書　１２：３５－３８

司祭　ヨハネ 井田　泉

2024 年 3 月 23 日

日本聖公会京都教区主教座聖堂（聖アグネス教会）

「主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。」ルカ 12:37

わたしたちの主イエスは、いつの日か必ず言われるでしょう。「わたしの僕たちよ、あなたがたは幸いだ。わたしが言ったことを忠実に果たしてくれた。わたしの祝福を受けなさい。一緒に喜ぼう。」

いつか必ず、そのようなイエスの喜びの声、祝福の声を聞くようにと招かれたのが、今日執事按手を受けられるお二人です。その日に向かってお二人は、これまでもそうであったはずですけれども、今日から新しく信仰と奉仕の旅を始められる。ここに集まったわたしたちも、主イエスの祝福の声を聞く日を目指して、お二人と歩みを共にしたいと願います。

しばらくの時、お二人のこれまでとこれからについて、思いを馳せてみることにしましょう。

昔、ガリラヤ湖でペテロとその兄弟アンデレが、魚をとる漁をしていました。そこにイエスが来られて、二人を御覧になった。イエスは彼らに**「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」**（マルコ 1:17）と言われました。

同じことが起こりました。今日のお二人が、それぞれ何かをしていた人生のある時点で、イエスが近づいて来られた。それ

ぞれをイエスが見つめられた。そしてイエスは言われた。

「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう。」

迷いもためらいもあったかもしれません。しかしイエスに見つめられてしまった。イエスに呼ばれてしまった。しかも「人間をとる漁師にする」と決められてしまった。人間をとる漁師とは、神さまのために人を招く。神さまのために人をしっかり捕まえて救いへと導く、そういう働きをする人です。イエスご自身の働きを共にする人です。自分から努力してそうなるというのではなく、イエスが「あなたがたをそういう者にする」と言われたのです。

そのようなイエスの招きが、引き寄せがあったので、二人は今日まで、ここまで来られました。一人で来たのではない。様々な経緯の中で、人の祈りと支えがあって、主イエスの守りと導きがあってここまで来られたのです。

今、お二人は執事の職を受けようとしています。それを思いつつ、先ほどの福音書のイエスの言葉に心を留めましょう。

「主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。」ルカ 12:37

この続きに、ペテロの質問に答えて、イエスがもう少し詳しく語っておられる言葉があります。

「主は言われた。『主人が召し使いたちの上に立てて、時間どおりに食べ物を分配させることにした忠実で賢い管理人は、いったいだれであろうか。主人が帰って来たとき、言われたとおりにしているのを見られる僕は幸いである。』」12:42-43

主人の留守の間、家を守り保つように任された僕は、ここでは「主人が召し使いたちの上に立てて、時間どおりに食べ物を分配させることにした忠実で賢い管理人」と言われています。これは執事の務めに当てはまります。

「時間どおりに食べ物を分配する」。家の人みんながひもじい思いをしないように、決まった時間に、公平に、食べ物を分配する。言い換えれば、信仰共同体に、教会に、福音の言葉が浸透して人々を養っていくように、神さまの愛が皆を潤し励ましていくように配慮し、力を傾ける。しっかりとその働きを継続していく。**「時間どおりに」**というのは毎主日の決まった時間の礼拝を思わせます。**「食べ物」**はみ言葉と聖餐を思わせます。どうか聖書としっかり取り組んで命のある説教を目指してください。礼拝を中心として、人々を支え養ってくださいますように。

お二人はこれから執事として、それぞれの任地で、教会の充実と成長のために力を尽くしてくださることと信じます。現実の教会は人間の集まりであって、さまざまな悩みや困難を持っ

ているかもしれません。けれども神さまは、教会をとおして人類を、世界を救おうと決められました。イエス・キリストは教会をご自分の体として愛しておられます。もし教会に傷があるとすれば、その傷はイエス・キリストがご自分の傷として痛みつつ、その癒やしのために働いてくださいます。

教会の営みの中心は礼拝です。礼拝が心からの祈りの時、生きた神さまとの交流の場となるように努めてください。こう言っただけでは抽象的で何かはっきりしないので、いくらか例を挙げます。

一つ目の例。ある人が今日は特に祈りたいと思って礼拝に行きました。胸に重いものを抱えておられたのです。礼拝堂に着いてひざまずいて祈った。けれどもとても祈りにくい。会衆のおしゃべりの声が大きいからです。オルガンの前奏が始まっても、まだそれは続いていた。そういうことがあると、次に教会に行くのに気持ちの上でブレーキがかかってしまいます。礼拝が始まろうとする時には、祈りの空気ができていてほしい。教会は神の家、祈りの家であってほしい。

二つ目の例。聖餐式は**「主イエス・キリストよ、おいでください」**という司祭の祈りで始まり、会衆が**「弟子たちの中に立**

ち、復活のみ姿を現されたように、わたしたちのうちにもお臨みください」と応答します。その言葉のとおりに、司式者、教役者と会衆が一緒に、主イエス・キリストがここに来てくださるように心から呼び求めて礼拝を始めたい。イエス・キリストがここにほんとうに来てくださってこそ、礼拝はわたしたちを生かすものとなります。イエスはわたしたちを愛して、わたしたちと出会おうとして、わたしたちを生かそうとして来られるのですから。

三つ目の例。執事は聖餐式の中で福音書の朗読をします。まず**「主は皆さんとともに」**と言います。そのとき、ただそう書いてあるからそう言うのではなく、しっかり会衆に呼びかけてください。会衆は**「また、あなたとともに」**としっかりそれに応答してください。わたしたちの祈祷書、礼拝式文の大事な特徴の一つは、この呼びかけと応答です。この呼びかけと応答がしっかりとなされるとき、礼拝は生きたものとなってきます。

こうした礼拝の学びや分かち合いを教会の中で積み重ねていくことができれば、わたしたちは礼拝をとおしていっそう力を受けるようになるでしょう。

さて執事は、教会と世界のために奉仕の働きを担います。そ

れは多様な広がりを持ちますし、またそれぞれに与えられた賜物が生かされることが大切です。先ほど使徒書でこう聞いたとおりです。

「わたしたちは、与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っていますから、預言の賜物を受けていれば、信仰に応じて預言し、奉仕の賜物を受けていれば、奉仕に専念しなさい。また、教える人は教えに、勧める人は勧めに精を出しなさい。施しをする人は惜しまず施し、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は快く行いなさい。」ローマ 12:6-8

奉仕の働きは多様なのですが、ただ一つ、聖職のだれもが必ず大切にすべき奉仕があります。それは個人の祈りの時を持つということです。自分のために祈り、人のために祈ります。信徒のためにも、また新しい人のためにも祈ってください。付属施設があれば、その職員のためにも祈ってください。名前を挙げて、祈りつづけてください。

もう 20 年も前のことですが、わたしは京都市内のある教会におりました。付属の幼稚園には熱心で誠実な職員がおり、またキリスト教にとても関心のある保護者がおられました。いずれも信徒ではありませんでした。そのうちの特に二人について、この方たちは洗礼を受けるべき人だと、わたしは感じました。

それで毎日祈りました。そしてひとりは約2年後に洗礼を受けられました。もうひとりはどうしてもそのようには進まず、わたしも任地が変わってほぼ諦めていました。ところがそれから 10 年くらいたって、その方は別の教会で洗礼を受けるに至ったのです。いずれも今、熱心な信徒として活動されています。祈りは不思議に聞かれる。神さまは聞いておられるということを知りました。

パウロはとても苦労しつつも、そのことを知っていたのでしょう。使徒書の終わりのほうでこう語っていました。

「怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい。希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。」12:11-12

苦労しながら祈りつづけることは、決して空しいことではないのです。

祈りの時は大切な奉仕の時と言ったのですが、これはただ奉仕であるばかりではなく、自分を守るための時、神の恵みを受ける時なのです。毎朝、聖書の黙想と祈りの時を持つなら、それが自分を守ってくれます。その日の聖書の言葉によって、神さまがわたしを支え導いてくださいます。

例えばこんなふうです。わたしは昨日、聖公会の聖書日課に従って詩編、旧約聖書、新約聖書を読みました。三つの聖書日課を読んでしばらく静かにして過ごし、読んだ中から一つだけ

短い聖句を選んでノートに書きました。詩編第 132 編 12 節です。

「この体はあなたの僕です。」（이 몸은 당신의 종입니다.）

韓国の「共同翻訳聖書」で読んだのでこんな訳になっていたのですが、普通は「わたしはあなたの僕です」と訳されます。それはそれとして、この体、この手、この頭、この足……わたしの体はあなたの僕。わたしは、わたしを弟子として招き、わたしを僕として用い、わたし愛する子としてくださったあなたの僕。わたしはそのようなあなたの僕。――ここからささやかではあっても、慰めと励ましを受けます。

わたしが神学校を出て現職として働いた 43 年間、またその後も、怠った日もありましたが、この聖書と祈りの時によって支えられて、何とか務めを続けることができたのでした。

神さまはただ務めを与えるだけではなく、務めとともにそれを行うための力を与えてくださいます。

これから聖職の務めを負われるお二人。その働きを重ねて、やがてそれを終える時が来ます。家のことを僕に託して行かれた主人が、つまりわたしたちの主イエスが帰って来られる時が来ます。初めに読んだ福音書です。

「主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。」ルカ 12:37

その続きに主は言われます。

「はっきり言っておくが、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。」12:37

このように主イエスは、主のために働いた僕を喜び、接待してねぎらってくださるというのです。何という幸いでしょうか。二人のみならずわたしたち皆が、主の用意してくださる喜びの食卓に招かれています。そのとき、わたしたちは感謝しつつ、自分の不忠実を懺悔して赦しを乞うでしょう。その喜びの日に向かって一緒に歩んで行きましょう。

父と子と聖霊なる三位一体の神さまが、今日執事に按手されるお二人を祝福し、力づけてくださいますように。また神さまがわたしたち一同を励まして、神さまの願いの実現のために用いてくださいますように。アーメン